

Fatih 4517 ペルシア語写本 *Nuzhat al-Qulūb* に 見えるルーム地方の記述について

井 谷 鋼 造

On the Description of Rūm in the Persian MS.
of *Nuzhat al-Qulūb* (Fatih 4517, Süleymaniye-Istanbul)

KOZO ITANI

は じ め に

筆者は、かつて西暦14世紀にイランのモンゴル政權、イルハン国の財務官僚を務めた Ḥamd Allāh Mustawfī Qazwīnī によって著されたペルシア語史料である、*Nuzhat al-Qulūb* (以下NQと略称)の既存の校訂テキストをもとに、ルーム地方(現在のトルコ共和国の大部分を占めるアナトリアの歴史的名称)の都市の記述を訳出した¹⁾。その際には史料の写本は全く利用できず²⁾、Guy Le StrangeとMuḥammad Dabīr-Siyāqīによってそれぞれ校訂されたペルシア語テキストをもとにしたため、テキスト中の不明な箇所を写本に遡って検討することは不可能であった。幸いに、この度機会を与えられて1991年4月から1992年3月までトルコ共和国に滞在した間に、イスタンブルのスレイマニエ図書館でNQの写本を3冊実見、精査することが出来、そもそも写本のレヴェルでこの史料がいかなる性格をもつものであったのか、という問題を考察する際の糸口が与えられたように思われる。

本稿では、まずスレイマニエ図書館所蔵のペルシア語写本Fatih 4517について解説を加えた後、この写本中に見えるルーム地方の記述を既存の校訂テキストの記述内容とその相違点を中心に比較した上で、史料そのものの性格付けを考える際に重要なポイントとなるであろうと思われる写本自体の特徴を幾つか指摘したい。

1. Fatih 4517 写本について

スレイマニエ図書館の写本目録カードを引くと、NQには4冊の写本が所蔵されていることが分かる。写本の請求番号で書けば、Fatih 4517 (ヒジラ暦881年筆写)、Halet Efendi 743 (1020年)、Ayasofya 2131 (1072年)、Esad Efendi 2505 (1229年)の4冊である。のうち最後のものは書写年代がとりわけ新しいので、写本研究の対象としては取り上げなかった。Fatih 4517 写本 (以下F写本と略称) は354葉からなり、1頁には19行、読み易いタアリック書体の文字で書かれ、サイズは18×24cmの縦長型、茶色の皮製本で、黒と朱の2色のインク (朱は主として項目見出しの地名等を書くのに用いられている) が用いられている。この写本の末尾 (354v) には、奥書としてAnwarī b. Bayānīという人物の手で881年にこの写本が書かれたことが記されている。しかし、実際にこの奥書を見てみると、881年という記年に疑問がないわけではない。この記年はアラビア文字の数字で書かれており、2, 3桁目は明瞭に読み取れるが、1桁目の数字は明確に1と決め難いのである。筆者自身は最初これを5と読んでいたし、かつてこの写本を利用したトルコのトガン (Ahmet-Zeki Validi) はこれを7と読んだのである³⁾。このように不明瞭な数字ではあるが、いずれにせよ、F写本がヒジラ暦880年代 (西暦では1475～1485年) に書かれたものであることは間違いなく、NQの写本のうちではかなり古い時代に属するものの一つである。

ここで、その他のNQの写本についての情報を集めてみると、次のようになる。まず、ルストレインジがその校訂テキスト出版に当たって主として利用した写本は当時の大英博物館所蔵の6冊の写本である。Charles Rieuの同図書館ペルシア語写本目録によれば、そのうちで書写年代が明白に判明している最古の写本はヒジラ暦984年ズルヒッジャ月 (1577年) に完成したもので、F写本よりは100年前後新しいものである⁴⁾。ルストレインジはこの他、ケムブリッジ、オクスフォード、ヴィーン、パリにある写本を参照したとしているが、中でもパリの写本 (Bibliothèque Nationale, Anciens Fonds 139) はその書写年代の古さで注目に値する。それは853 (1449) 年に書写されたもので、F写本より古い。但し、ルストレインジのテキストでは脚注でヴァリエントを示す際にもこの最古のパリ写本がどこで利用されたのかが一切示されておらず、写本間での表記や記述内容の異同を確認することは彼の校訂テキストによる限り不可能である。一方、イランのダビールスィヤーキーによる校訂テキストには、ルストレインジが利用できなかった909年ズルカアダ月5日 (1504.4.20) 書写の写本が用いられたとされる。この写本は書写年代から言えばパリの写本やF写本より新しいもののこれらに次ぐ古い写本である⁵⁾。ダビールスィヤーキーは利用した箇所をヴァリエントの形で脚注の中で示しているので、写本間の異同を確認することは可能であるが、彼がテキスト校訂に当たって必ずしもこの写本

を底本としなかったことは脚注の中に現れるヴァリエントが主としてこの写本によるものであることから明らかであろう。ルストレインジがその校訂テキストの緒言で

現在に伝わる形から判断して、*NQ* の草稿は著者によって完成されなかった。というのも、全ての古い写本ではしばしば距離や日付けが空欄となっているほか、町の名前のみが項目の見出しとして朱のインクで書かれてはいても、その町についての説明が全く欠落していることがよくある。より新しい写本やボンベイで出版された石版本（1894年）ではこれらの空欄は消え、本文は連続して、名前のみが書かれて説明の欠けた項目は断り無しに省略されている。事実、付け加えねばならないのは、その数が多く、その幾つかは卓越するものであっても、写本のみを頼りに地名を確実に再構することは無理だということである。⁶⁾

と述べているごとく、*NQ* に現れる地名の表記の確定は写本のみを検討することからは不可能に近い。筆者もイスタンブルで写本を実見してみても、改めてルストレインジの上記の説明に首肯せざるを得ないことを実感した。上にも名を挙げたゼキ・ヴェリディ・トガンは*NQ* について次のように述べている。

ハムドゥッラーフ・カズヴィーニーが1339年に著した*NQ* という名の地理書はホラーサーンを除くイルハン国の1336年の国家予算を伝えている。この情報の小アジアに関する部分は、イルハン国時代にこの地域の、特にどの地域や都市が実際にモンゴル人に服属していたかを示す点で、とても重要である。ハムドゥッラーフが都市を一貫してではないにせよ、アルファベット順に記録していることと諸写本の中で都市の名称がひどく混乱しているため、その利用はたやすいことではない。例えば、ルストレインジの校訂テキストにせよ、翻訳にせよ、それらから一つのまとまった考えを得ることは不可能である。⁷⁾

NQ の既存の校訂テキストを利用し、また、写本を検討する際にもトガンやルストレインジの上述のようなコメントは常に念頭においておく必要がある。

さて、以下ではF写本の巻頭に掲げられた内容目次 (fihrist) に従って、写本の内容構成を見ておこう。括弧内の数字はその始まりの葉数を示す。

Fihrist	(内容目次) (5v-8r)
Fātiḥa	(緒言) Muqaddima (8r) と Dibācha (53r) に分かれる。
Maqāla-yi Awwal	(第1話) 動・植・鉱物三界について。3 Martaba に分かれる。 (58r)

Fatih 4517 ペルシア語写本 *Nuzhat al-Qulūb* に見えるルーム地方の記述について

Maqāla-yi Duwwum	(第2話) 人間について。(142 r)
Maqāla-yi Siyyum	(第3話) 都市や地方について。4 Qism に分かれる。(210 r)
Qism-i Awwal	(第1部) 世界で最も高貴な場所であり、信仰をもつ人々のキブラである、両聖都 (Haramayn Sharifayn) とアクサー・マスジドについて。(210 r)
Qism-i Duwwum	(第2部) イーラーンについて。Maṭla' (218r), Maqṣad (226r), Makhlaṣ (289 v) に分かれる。
Qism-i Siyyum	(第3部) イーラーンには属さないが、その四方にあってイーラーンの統治 (ḥukm) が行われていた地方について。(326 r)
Qism-i Chahārum	(第4部) 諸地方にある有名な建造物について。(332 v)
Khātima	(結語) イーラーンザミーン以外の諸地方の不可思議 ('ajāyib) について。(347 v)

F 写本にはこれらの本文の間に、星座の表 (20 v-21 r), 星座の図と表 (44 v-45 r), 経緯度線付きの地図 (220 v-221 r), キブラ計算のための「ヒンドの円 (Dā'ira Hindi)」図 (224 r), キブラ計算のための表 (225 v), 大陸・海洋の位置を示す円形の世界図 (319 v-320 r) 等が挿入されており、特に最後に挙げた世界図では朱と黒のほか、灰色と青のインクが使用され、図としての見やすさに工夫が凝らされている。F 写本の他に筆者がイスタンブルで実見した *NQ* の 2 写本 *Halet Efendi* 742 (以下 H 写本と略称) と *Ayasofya* 2131 (以下 A 写本と略称) では、同様の表や図はより粗雑であったり、形式的であったり、F 写本ほどの正確さや工夫を備えていない。その意味では写本研究の際に F 写本は不可欠の存在であるといえる。ちなみに、H 写本は全 210 葉、ヒジラ暦 1020 年サファル月 1 日 (1611. 4. 15) に Shams al-Dīn b. Ni'mat Allāh al-Mūsawī という人物によって筆写されたもの、A 写本は全 202 葉、1072 年ラビーウ I 月 8 日 (1661. 11. 1) に 'Ayn 'Ali Tabrizī という人物によって筆写されたものである。

2. Fatih 4517 写本中のルーム地方に関する記述について

F 写本中のルーム地方に関する記事は、*NQ* 第 3 話の第 2 部中 *Maqṣad* の第 7 章をなし、写本では 256 r の 1 行目から 259 r の 9 行目までを占める。以下ではこの記事とルストレインジ (以下 LS と略称) 及びダビールスィヤーキー (以下 DS と略称) のそれぞれの校訂テキストとの地名表記の相違や説明内容の相違の比較を基に F 写本中のルームに関する記述の特性について考察してみたい。

F 写本の上記の該当箇所を LS, DS と比較してみると、LS との間では 198 箇所、DS との間

では190箇所もの相違点が見られる。但し、LSとDSとの間でも55箇所の相違があるので、単に数の多さだけでなく、相違の内容を点検することが必要である。相違点のかなりの部分は、ペルシア語の接続詞 wa、関係詞 ki、後置詞 rā、前置詞 bi や bar、不定を示す yi、be 動詞3人称単数形 ast などの有無であったり、用いられる単語が単数形か、複数形かの相違、語順のささいな変化、例えば、ある町の産物が「綿と果物」とされる場合と「果物と綿」とされる場合のように記述内容を大きく違える場合ではない。LSとDSの間の相違はほとんどがこのような種類のものである。しかし、以下に代表例を挙げて指摘するような相違点は、単に筆写の際の誤記やコピー手の不注意によるものとは考えられず、写本の性格やその成立事情とも関わる問題であると認識しなければならないであろう。

(A) 地名表記の相違

F写本の ABQRH (256r) はLS, DSでは ANQRH であり、LS, DSはこれをアンカラと読んでいる。また ARMYAL (256v), DHRLW (257r) はLS, DSでは ARMNAK, DWYRGY であり、前者はエルメナク、後者はディヴリイを指す。このような例は他にもカラヒサル (F: Qarahiṣār-i MWAS(257v)/LS, DS: Qarahiṣār-i BWASY), ニイデ (F: NKDH(257v)/LS: NYGDH, DS: NKYDA), カパドキヤ (F: QYADF(257v)/LS, DS: QPADQ), コンヤのガヴァラ要塞 (F: KWRH(257v)/LS, DS: KWLH), ルウルウ (F: LRLWH(258v)/LS, DS: LWLWH), マラトヤのクラウドィーヤ要塞 (F: Qal'a DYH(258v)/LS: ARQLWDYH, DS: QLWDYH), スィヴリヒサル (F: Sh'R? ḤṢAR(259v)/LS, DS: SWRYḤṢAR) 等の場合にみられる。

これらの地名は上記のもの全てが同時代の歴史資料の中に現れるので、どちらの表記が少なくともより一般的かを確定することが出来る。例えば、マラトヤのクラウドィーヤ要塞の場合、歴史家イブヌルアスィールの著作 *al-Kāmil fī al-Ta'rikh* にヒジラ暦140年(西暦757/8年)のこととして、アッバース朝の第2代ハーリーファ、マンスールがマラトヤに軍隊を送って、QLWDYH 要塞を建設させたことが記録されているので、DSの表記が最もそれに近い。F写本のように Qal'a DYH のように読むとすればペルシア語で「村の要塞」の意味になり、本来の固有名詞としての表記から離れてしまうことになる。総じてF写本の地名表記はLS, DSに比べて不正確であり、地名表記のヴァリエントは提供するものの、F写本を基にLS, DSの地名表記を訂正しなければならない箇所はない。

(B) 緯度と経度、徴税額の相違

NQでは主な都市の説明に当たってその町の緯度と経度、及び徴税額 (ḥuqūq-i diwāni) が記されている。そのうち緯度と経度はアラビア文字の字母数値(アブジャド)を用いて、徴税額は文字を使った数値(例えば、1,000は hazār のように)によって表される。例えば、F写本で

スィヴァスとカイセリの緯度はアラビア文字で $L\dot{T}L$ (256 r, 258 r) と表されるが、これは 39 度 30 分を示している。LS, DS では共にスィヴァスとカイセリの緯度を $L\dot{T}K$ としており、これは 39 度 20 分になる。他にもカーリーカラー (=エルズルム) の緯度と経度が F 写本 (257 v) では 39 度 70 分 ($L\dot{T}$), 73 度 20 分 (JK) となっているのに対して、LS, DS では 39 度 40 分 ($L\dot{T}M$), 73 度 38 分 (JLH) である。F 写本の緯度 39 度 70 分というのは明らかに誤りであろう。

次に徴税額について、F 写本ではエルズルムの徴税額は 222,000 ディーナール (256 v) であるのに対して、LS, DS では 22,000 ディーナール。デヴェリ (F: 30,000(257r)/LS, DS: 40,000), カイセリ (F, LS: 104,000(258r)/DS: 140,000), ニクサル (F: 187,300(258v)/LS, DS: 187,000) 等においても相違がみられる。これらの数字についてはにわかにはどちらが正確であるのかを決め難い。ちなみにトガンはエルズルムの額のみ F 写本の数字を採り、上記のその他の都市については F 写本の数字を採用していない⁹⁾。

(C) 記述の順序や内容の相違

F 写本 256 r ではイスラームの聖典『クルアーン』59 章 28 節末尾の引用が次のように書かれている。“wa-mā kunnā fiḥā illā al-QWLY illā wa-ahluhu ẓālimūna” LS, DS では共に “wa-mā kunnā muhliki al-qurā illā wa-ahluhu ẓālimūna” であり、この一節が「また我々は、その民が悪を行わない限り、その町や村を滅ぼさなかった。」を意味する『クルアーン』の章句であるならば、当然 LS, DS の如くでなければならなかった。何故、F 写本では『クルアーン』からの引用が誤って筆写されたのであろうか。残念ながら、筆者は今のところ、この間に解答を与えられるだけの材料をもっていないが、このような誤記は、一般のムスリムのコピーストであれば考えられないことである。

F 写本 257 r ではテルジャン (F: DYRJAN/LS, DS: DRJAN) とハルプト (F: KhMYR??RShT /LS, DS: KhRTBRT) の内容記述が重複・混同している。まず、DYRJAN は「大きな町である。第 4 イクリームに属する。気候は良い。徴税額は 215,000 ディーナールである。」と説明され、続けて KhMYR??RShT に全く同文の説明が付されている。F 写本では KhMYR??RShT の説明は欄外に本文と同一の筆跡で、小さな文字で書き加えられていることから、この部分は筆写後コピースト自身によって追加・補訂されたのであろう。DYRJAN の本来の内容である、LS, DS に現れる「中位の町である。徴税額は 40,300 ディーナールである。」という部分は F 写本からは欠落している。

緯度と経度の所でも名を挙げたカーリーカラー (Qāliqalā) の説明の部分 (257 v) でも F 写本には不可解な表記が現れる。その一つは産物についてであり、この町にちなむ特産品の *zilū Qāli* が F 写本では MLW QANY となっている。*zilū Qāli* の語は、西暦 10 世紀に著され、13

世紀に書かれた写本が唯一つ伝存する、有名なペルシア語の地理書 *Ḥudūd al-‘Ālam* にもこの町に近い幾つかの町、アフラト (Akhlāt), エルジン (Arjij), ベルゲリ (Barkari), ビトリス (Bidlis), ホイ (Khūy), ナヒチェヴァーン (Nakhjiwān) の特産品としてその名を挙げられている。¹⁰⁾ 二つ目は、その地のキリスト教徒達の習慣にちなむことばとして「棕櫚の枝の夜」(shab-i Sha‘ānin) が LS, DS には出てくるのであるが、F 写本では shab-i siyāhī (「闇夜」の意) とされている。これも明かな誤記であり、おそらくこの部分の *NQ* の記述の情報源になったと思われる Zakariyā b. Muḥammad al-Qazwīnī の 13 世紀後半の著作 *Āthār al-Bilād* には「棕櫚の枝の夜」(layla al-Sha‘ānin) という単語がはっきりと用いられている。¹¹⁾

カイセリの説明の中で、その町に縁のある人物として、LS, DS では「信者達の長アリーの子、ムハンマド・ブン・ハナフィーヤ (Muḥammad b. Ḥanafīya b. amir al-mu‘minīn ‘Āli) の名が挙げられるが、F 写本 (258 r) では Muḥammad Ḥanīfa b. amir al-mu‘minīn ‘Āli となっている。これも LS, DS に従い、F 写本の表記を誤記としなければならない。この部分で一つ興味深いことは、信者の長アリーに対する賛辞が F 写本と LS, DS では異なっていることである。F 写本では一般的な「アッラーフが彼を嘉するように」(raḍīya Allāhu ‘anhu) という文言であるのに対し、LS, DS では「アッラーフが彼の顔を高貴ならしめるように」(karrama Allāhu wajhahu) である。V. Minorsky によれば後者の賛辞はスンナ派の者がアリーに付するものであるとされるので、今のところ他に全く確証はないが、F 写本のコピーストがあるいはスンナ派以外のムスリムであった可能性もある。¹²⁾

お わ り に

以上、F 写本と既存の校訂テキストとのルーム地方に関する表記や内容の相違点を中心に、F 写本の性格を考察してきたが、それは大凡次のようにまとめられるであろう。F 写本は *NQ* の現存する写本中ではかなり古いものの一つではあるが、これに頼って新たな校訂テキストを作成することは不可能である。ルーム地方に関する記述の中でも特にその表記の不正確さが目立ち、この写本のみには拠る限り、既存のテキストを越える質と量の情報は得られない。尤も、筆者にとってもこの写本を自ら実見・精査しなければこのような状態は理解し得なかったであろうし、ルーム地方以外の部分についてはこの写本が大いに役立つかもしれない。将来、より古い書写年代の、より正確な表記と記述内容をもつ善写本が発見されることがあれば、あるいは F 写本の表記や記述内容が如何なる理由により、上で述べたようになったのかも理解されるようになるかもしれない。筆者にとって *NQ* の写本研究はまだ始まったばかりなのである。

Fatih 4517 ペルシア語写本 *Nuzhat al-Qulūb* に見えるルーム地方の記述について

註

- 1) 拙稿「*Nuzhat al-Qulūb* に現れるルームの諸都市」『東洋文化学科年報』第2号, 1987年, 92-100頁
- 2) 現在我国では京都外国語大学に所蔵される写本コレクションの中に2点の *Nuzhat al-Qulūb* の写本を見ることができる。堀川徹・黒田卓「京都外国語大学所蔵ペルシア語およびオスマン=トルコ語写本コレクションについて(1)」『京都外国語大学研究論叢』XXV, 1985年, 476頁
- 3) Ahmet-Zeki Validi, "Mogollar devrinde Anadolu'nun iktisâdi vaziyeti", *Türk Hukuk ve İktisat Tarihi Mecmuası*, Cilt 1, 1931, s.22
- 4) Charles Rieu, *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*, Vol. 1, (reprint) 1966, pp.418-420
- 5) Muḥammad Dabir-Siyāqī (kūshish), *Bakhsh-i Nakhust az Maqāla-yi Siwum-i Nuzhat al-Qulūb*, Tehran, 1336, Muqaddima s. 6
- 6) Guy Le Strange (ed.), *The Geographical Part of the Nuzhat al-Qulūb*, Leyden & London, 1915, Preface p. 15
- 7) Ahmet-Zeki Validi, *op. cit.* s. 21
- 8) Ibn al-Athir, *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*, C. J. Tornberg (ed.), (reprint) Vol. 5, Bayrūt, 1402, s. 500
- 9) Ahmet-Zeki Validi, *op. cit.* s. 22-23
- 10) Manūchīhr Sutūda (kūshish), *Hudūd al-'Ālam min al-Mashriq ilā al-Maghrib*, Tehrān, 1340, s. 160
V. Bartol'd (vvedenie i ukazatel'), *Hudūd al-'Ālem, Rukopis' Tumanskogo*, Leningrad, 1930, 32 b
- 11) Zakariyā b. Muḥammad al-Qazwīnī, *Kitāb Āthār al-Bilād*, F. Wüstenfeld (hrsg.), (reprint) Vaduz, 1990, s. 370
- 12) V. Minorsky (trs.), *Hudūd al-'Ālam 'The Regions of the World'*, 2nd Edition, London, 1970, Commentary p. 392

[付記: 本稿は1991年度在外研究(研究課題「トルコ共和国内に所蔵されるアラビア文字手写本の研究」)の成果の一部である。]